

〔研究大会報告〕

第16回（2007年度）JAMS 研究大会報告 その5
—第2セッション雑感—

相原 啓人

日本マレーシア研究会の研究大会第2日目は、第二セッションとして鈴木陽一会員及び金子芳樹会員の司会の下、4名からの個別研究報告があった。同セッションは、二つのサブセッションに分かれた。

第一サブセッションでは田村慶子会員をコメンテーターにお迎えし、伊賀司会員による「マレーシアにおけるオールターナティブ・メディアの展開とその影響力」と題する報告と、綱島（三宅）郁子会員による「マレーシアにおけるマレー語聖書の翻訳小史—国語政策およびインドネシア語との比較を中心に—」と題する報告があった。伊賀会員の報告は、現在のマレーシアにおけるジャーナリズムが直面している事象に政治学的に切り込んだもので、非常に多くの知見を得ることができた。アブドゥラ就任以降、報道スペースが拡大し、一見すると報道の自由が以前よりも保証されているようにみえる。しかし、報告後のコメントや質問にもあったように、資本所有のみならず様々なチャンネルを通じて政府が介入していることには変わりなく、「誰が報じているのか who in fact reports?」という根元的な問題を考える重要性を認識することができた。マレーシアの政治経済を考える上で多くのヒントを得ることができたように思う。これに対して、綱島（三宅）会員は、筆者の専門外の分野であったものの、マレーシア研究の裾野の広さを垣間見ることのできるものであった。言語文学的観点のみならず、聖書翻訳というイシューを他の側面から眺めようとするコメントや質問があった。特に、「誰が翻訳された聖書を購入したのか、必要とするのか」という質問は、社会的観点から考えると非常に興味深い。ここ数年、宗教を巡る事案が国会での答弁をヒートアップさせている。これらの一側面を知る意味でも綱島（三宅）会員の報告は、非常に興味深いものであった。

第二サブセッションには吉村真子会員をコメンテーターにお迎えし、筆者の「アブドゥラ政権下の労働市場政策に関する試論—マハティールによるアブドゥラ批判を念頭に—」と題する報告、そして、岡本義輝会員による「研究開発（R&D）の国際移転論—マレーシアにおける日系AV企業R&D移転の実証的研究—」と題する報告があった。筆者の報告では、マハティールとアブドゥラ、さらには他国との比較研究を行うための土台を築くことを最終目的とした。報告後のコメントにもあったように、マレーシアという国をより広く研究するためにも、労働問題に関する国際条約・規約とマレーシアの関連を考えつつ、マレーシア国内事情を反映する雇用関連政策にも目を向け、雇用者団体へのインタビューも繰り返す重要性について再認識することができた。これに対し、岡本会員の発表では、日系企業への広範なインタビューと現場での鋭い観察に基づいた新たな知見が豊富に含ま

れ、マレーシアにおける日系企業の現場を知る意味でも非常に興味深い報告であったといえよう。特に、シャープのエンジニアとしての長年のご経験をお持ちになる岡本会員が報告した商品開発の現場というものは、日系企業の「競争力」だけでなく、マレーシアの「競争力」を考える上でも重要な視点であったと思う。

第二セッションでは、現代マレーシアに関する発表が多勢を占めた。しかし、フロアからは、歴史的観点からの質問もあり、改めて我が国におけるマレーシア研究の裾野の広さを垣間見ることができた。国内には多くの問題も抱えているように思えるが、世界の発展途上国を見渡すと、マレーシアは経済発展の分野では優等生といえる。初日には、独立50周年を迎えた「これまでのマレーシア」と「これからのマレーシア」に関する報告、そして積極的な議論が展開された。右についてさらに調査、研究していく上でも、第2セッションは、非常に示唆に富むものであったと思う。